

早期修了プログラム達成度自己点検シート【履修生用】

提出日: 平成 年 月 日
 履修(希望)者氏名: 筑波 太郎
 (希望)専攻: 知能機能システム専攻
 指導(希望)教員名: 朝永一郎
 指導(希望)分野: 非線形力学

注: 入学時には、①、③、⑤、⑥、⑦でD(博士)、他の項目ではM(修士)あるいはD(博士)のレベルであることを主張して下さい

観点	項目	自己評価レベル				自己評価の根拠(以下: 記入要領)	各研究科・専攻での特記事項等
		入学時 審査時	中間 審査時	予備 審査時	最終 審査時		
知識・能力	① 専門基礎: 入学者の専門分野について、博士の学位にふさわしいレベルの基礎能力を有しているか。	A				別添業績リストに示すように、これまでソフトコンピューティングを応用した感性情報処理に関して、3編の査読付き学術雑誌論文が掲載されている。2004年に発表した計測制御学会論文では、ファジィ理論とニューラルネットワークを組み合わせたアプローチを開発し、楽曲の変奏に応用した。筆頭著者としてこの論文を書いており、アルゴリズム開発、プログラム開発、被験者実験すべてを担当している。また、2005年のNew Generation Computing 誌では、やはり第一著者として、2004年に開発したアプローチを高度化させ、オリジナルな楽曲が作れる作曲システムの構築についてまとめている。さらにSoft Computing誌では、進化的計算手法をも組み込み、音楽情報、画像情報、テキスト情報を組み合わせたマルチメディア情報処理問題に取り組んでいる。これら一連の論文では進化的計算手法を応用するなど提案手法は徐々に高度化されている。また、この手法は実用システムとして商用化されており、システムの概念設計も申請者が行った。これらの成果から、専門基礎の項目については、博士のレベルであることを主張する。	
知識	② 関連分野基礎: 専門に関連した分野について、専門分野ほど深くはないとしても、博士の学位にふさわしいレベルの基礎能力を有しているか。	B				修士在学時に、ファジィシステム理論、人工知能特論、人間機械協調システム、知的制御システム、コンピュータビジョン、生体情報処理など、知能機能システムについての科目を習得した。	
分析力	③ 現実問題に対する分析力: 現実の問題について、博士の学位にふさわしいレベルのセンス・見識を備えているか。	A				申請者は、〇〇株式会社中央研究所に10年間勤務し、その間、現実の問題として、感性情報処理、音楽情報処理、画像情報処理などの応用問題のプロジェクトを手がけてきた。開発したシステムはすべて実用に移されており、特許申請(共同)も3件行っている。また別に、移動用ロボットの開発も手がけ、学会発表を行っている。さらに、歩行者ナビゲーションシステムの開発も手がけている。	

教養	④ 広い視野:博士の学位にふさわしい視野の広さを有しているか。	A				上記の現実の問題のなかで、様々な研究者、技術者と議論し、関連分野として、人工知能、ロボティクス分野、画像処理分野、情報処理システムについて学習を行った。従って、博士にふさわしい広い視野を有していると主張する。	
総合力	⑤ 問題設定から解決まで:専門的応用能力である問題設定から解決までのプロセスを理解し、具体的解決に導くことができるか。	A				上記の現実問題においては、単に新規性のあるアルゴリズムを開発すれば足りるというものではなく、まず問題の所在を明らかにするため、関係者と討議を重ね、関係者の意図に沿ったシステム開発を行ってきた。移動用ロボットや歩行者ナビゲーションシステムの開発がこれに相当する。また、マルチメディア情報処理システムの開発では、利用者に便利なインターフェースや、利用者の知識を取り入れた開発を行ってきた。このように、上記の開発には、問題設定から解決までのプロセスが含まれている。	
表現力	⑥ コミュニケーション能力と国際的通用性:博士の学位にふさわしいプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を有し、専門分野において国際的に通用する学識を備えているか。	A				国際学会のうち4回は海外で英語による発表を行った。また1回については国内で英語発表を行っている。	
総合力	⑦ 学術的成果:博士の学位を授与してよいと判定できる学術的成果を有しているか。	A,B,C				業績リストによって判定するので、記載は不要です。	

注1: 自己評価レベルについては、「A(博士の学位にふさわしいレベル)」、「B(修士の学位レベル)」、「C(学士の学位レベル)」を基準として自己評価を行う。

注2: 自己評価で「A」評価とし、教員側の評価においても「A」評価とされた項目については、「自己評価の根拠」欄に「達成済み」と記入すること。
ただし、その場合でも、さらなる進歩(例えば、新規能力の獲得、公表論文数や学会発表数の増加)などがある場合は、それらを付記してよい。

注3: 「最終審査時」の達成度自己評価は不要とする。

注4: A4用紙で2枚程度に収まるように記入する。なお、記入セルサイズの変更を可とする。